

## 『大乘起信論』の引用文献

大竹 晋

小稿は「大乘起信論」の引用する九つの「修多羅」の出典

を明らかにする。高崎直道博士が「起信論」が「修多羅に言う」として引用するものがほとんど現存の経論中に文字通り対応する文を見出し得ない<sup>[1]</sup>ことに注目し、同論の純粹なインド撰述を疑う一根據とされたように、「修多羅」の出典は同論の成立問題における重要な論点である。いっぽう、同論が菩提留支や勒那摩提の翻訳と内容上・用語上の相似性を有することを竹村牧男博士が指摘しており、「修多羅」の若干も同博士により菩提留支の講義録「金剛仙論」や、勒那摩提訳「究竟一乘宝性論」との関連を示唆されている。しかしそれは全てに及んでいないわけではない。小稿では筆者が近年従事している菩提留支研究に基づき、「修多羅」の出典をすべて突き止め、そこから「大乘起信論」の成立問題にも提言を試みたい。

なお、最近「大乘起信論」と菩提留支との関係を示唆する六世紀の資料を知った。敦煌出土地論宗綱要書S4303がそれ

である<sup>[2]</sup>。

問曰。此三種仏還当一時成仏、還有前後。

答曰。依三藏解、①法仏古今常凝然無修無得、体成在先。十地菩薩能化作仏、乃至、種生菩薩亦能八相成道。故知応仏亦在先成。報仏廻自行成満、要在金剛已後。②或復有説（一時成）。③或復有一仏前成法仏後成。（以下略）問うて曰わく。此の三種仏は還た当に一時に成仏すべしや、還た前後有りや。

答えて曰わく。三藏の解に依るに、①法仏は古今に常に凝然として無修無得、体成すること先に在り。十地の菩薩は能く仏を化作し、乃至、種生の菩薩も亦た能く八相成道す。故に応仏も亦た先に成ずるに在りと知る。報仏は自行の成満せるに廻るものなれば、要ず金剛已後に在り。②或いは復た（一時に成ず）と説くこと有り。③或いは復た二仏前に成じ法仏後に成ずること有り。

仏の三身は一時に成ずるのか、前後があるのかを問ひ、三藏の解を引いて答えているのであるが、①のうち法身を説く「法仏古今常凝然、無修無得」は『金剛仙論』巻二の「仏性法身凝然常住」(T25:895c) および巻八の「法身仏古今湛然体性円満、非修得法」(T25:858c) に対応し、報身を説く「報仏撰自行成満、要在金剛已後」は同じく巻九の「金剛心謝、証種智時、名為報仏」(T25:864b) に対応するため、三藏は菩提留支と見てよい。

ところで応身を説く「十地菩薩能化作仏」は菩提留支訳で言えば『無量寿経優波提舎』に出る説であるが、「種生菩薩亦能八相成道」というのがやや明確でない。文脈から見れば十地より前の菩薩であるから、種生は種性であつて、『金剛仙論』がしばしば「性地菩薩」と呼ぶ地前の菩薩のことと推測される(後出Q8 往見)。しかして地前の菩薩が八相成道するとは、筆者の知る限り、『大乘起信論』の信成就発心の次の説にしか例がない。

菩薩発是心故則得少分見於法身。以見法身故隨其願力能現八種利益衆生。所謂、從兜率天退、入胎、住胎、出胎、出家、成道、転法輪、入於涅槃。

(T32:581a)

菩薩は是の心を發するが故に則ち少分に法身を見ることを得。法身を見るを以つての故に其の願力に隨いて能く八種を現じ衆生を利益す。所謂る、兜率天より退くと、胎に入ると、胎に住すると、胎を出づると、出家すると、成道すると、法輪を転ずると、涅槃に入るとなり。

このような事實は竹村博士の着眼の正しさを証明するものと言えよう。以下においては同博士の『大乘起信論説釈 改訂版』山喜房仏書林、一九九三を従来の研究の水準を示すものとして常時参照する(「説釈」と表記)。

\* 漢文の訓説は筆者独自の見解で行なう。梵文や藏訳を付記する場合は訓説を省略する。

Q1 如菩薩地尽、満足方便、一念相應、覺心初起心無初相。以遠離微細念故、得見心性。心即常住。名究竟覺。是故「修多羅」説「若有衆生能觀無念者、則為向仏智」故。

(T32:576b)

菩薩地の尽の如きは、方便を満足し、一念と相應して、心の初起の心に初相無きを覺す。微細念を遠離するを以つての故に、心性を見ることを得。心は即ち常住なり。究竟覺と名づく。是の故に「修多羅」に「若し衆生の能く觀するに念無きもの有らば、則ち仏智に向かうと為す」

というが故にと説く。

この『修多羅』について、『疏釈』(二〇〇頁)は「楞伽經」だとする慧遠『大乘起信論疏』の説に言及して「取意と見られてゐる」と述べている。筆者は上の文全体を、勒那摩提訳『究竟一乘宝性論』巻二における「及遠離諸垢」(nirmala tattva. 無垢真如)「仏無量功德」(vimala buddhagunāh. 離垢仏功德)の説明に対応するのではないかと考える。

「及遠離諸垢」者、真如非本有染、後時言清淨。此処不可思議。是故『經』言「心性清淨。自性清淨心本來清淨。如彼心本体、如来如是知。是故『經』言『如来一念心相應慧得阿耨多羅三藐三菩提』」故。

「仏無量功德」者、謂前際後際於一向染凡夫地中常不捨離真如法身。一切諸仏法無異無差別。此処不可思議。是故『經』言「復次仏子、如来智慧無処不至。何以故。以於一切衆生界中終無有一衆生身中而不具足如来功德及智慧者。但衆生顛倒不知如来智。遠離顛倒、起一切智無師智無礙智。以下、いわゆる微塵含千の喩を説く」故。

(T31:827ab)

tatra nirmalā tattvatā purva-māsaṃkṣiptā pascād viśuddhety acintyaṃ etat sṭhānam. yata āha - prakṛtiprabhāsvaram

cittam. tat tathaiiva jñānam. tata ucyate - ekakṣaṇa-takṣana-samāyuktayā prajñayā samyaksambodhir abhisambuddhetti. tatra vimalā buddhagunāh parvāpariyenātkānta-saṃkṣiptāyaṃ api pṛthagjanabhūmāv avinirbhāga-dharmatayā nirviśiṣṭā vidyanta ity acintyaṃ etat sṭhānam. yata āha - na sa kaścit sattvaḥ satvanikāye saṃvidyate yatra tattāgatajñānaṃ na sakālam anupreviṣṭam. api tu saṃjñāgrāhataḥ tattāgatajñānaṃ na prajñāyate. saṃjñā-grāha-vigamāt punaḥ sarvajñajñānaṃ svayambhūjñānam asaṅgataḥ prabhavati. (RGV 22, 5-12)

前半「及遠離諸垢」の解釈においては次のような対応が認められる。

【大乘起信論】「究竟一乘宝性論」

「遠離微細念」|| 「及遠離諸垢」

「心即常住」|| 「心性清淨」

「得見心性」|| 「如彼心本体、如来如是知」

「一念相應」|| 「一念心相應慧」

そして、後半「仏無量功德」の解釈において引かれる「遠離顛倒、起一切智無師智無礙智 (saṃjñā-grāha-vigamāt punaḥ sarvajñajñānaṃ svayambhūjñānam asaṅgataḥ prabhavati)」なる『經』が、『大乘起信論』において引かれる「若有衆生

能觀無念者、則為向仏智」なる「修多羅」に対応する。これは「華嚴經性起品」である。この同定が正しいとすれば、「大乘起信論」における引用は取意ということになるであろう。

Q2 同相者、譬如種種瓦器皆同微塵性相、如是無漏無明種種業幻皆同真如性相。是「修多羅」中、依於此真如義故說「一切衆生本來常住入於涅槃。菩提之法非可修相、非可作相、畢竟無得」。亦無色相可見而有見色相者、唯是隨染業幻所作、非是智色不空之性、以智相無可見故。

異相者、如種種瓦器各各不同、如是無漏無明隨染幻差別性。染幻差別故。  
(T32:577ab)

同相とは、譬えば種種の瓦器の皆な同じく微塵を性相とするが如く、是の如く無漏と無明との種種の業幻も皆な同じく真如を性相とす。是こをもつて「修多羅」の中に、此の真如の義に依るが故に「一切衆生は本來常住にして涅槃に入れり。菩提の法は修す可き相に非ず、作す可き相に非ず、畢竟じて無得なり」と説く。亦た色相の見る可きもの無きも而も色相を見ること有るは、唯だ是れ染なる業幻の所作に随うのみ、是れ智色なる不空の性に非ず。智相に見る可きもの無きを以つての故に。

異相とは、種種の瓦器の各各同じからざるが如く、是の如く無漏と無明とも染幻に随う差別の性なり。染幻は

差別なるが故に。

同相・異相は菩提留支訳「入楞伽經」卷三(T16:528a; LAS 89,9)の「離同相異相 (sva-samānyā-laksanā-virahita)」にて、共相・自相のことと推定できる。この「修多羅」について、「說釈」(二五三頁)は「大品般若經」とする元曉「大乘起信論疏」の説と、「維摩詰所問經」とする法藏「大乘起信論義記」の説とに言及している。筆者は後者と見る。鳩摩羅什訳で示すと次のようである。

若弥勒得阿耨多羅三藐三菩提者、一切衆生亦應滅度。所以者何。諸仏知一切衆生畢竟寂滅即涅槃相不復更滅。是故弥勒、無以此法誘諸天子。實無発阿耨多羅三藐三菩提者、亦無退者。弥勒、当令此諸天子捨於分別菩提之見。所以者何。菩提者不可以身得、不可以心得。寂滅是菩提。

(T14:542b)

Byans pa khyod gang gi tshe yongs su mya ngan las 'das pa dei tshe sems can thams cad kyang yongs su mya ngan las 'da' bar 'gyur ro // de ci'i phyir zhe na / sems can thams cad yongs su mya ngan las ma 'das par de bzhin gshegs pa yongs su mya ngan las mi 'da' ste / de dag gi sems can thams cad shin tu yongs su mya ngan las

'das shing mya ngan las 'das pa'i rang bzhin can du  
mthong bai phyr ro // Byams pa de lha bas na lha'i bu  
'di rnam ma brid ma stu shig / byang chub la ni su yang  
mi gnas mi ldog gi / Byams pa lha'i bu 'di dag byang  
chub la kun tu rtog par lha ba de 'dor du chug shig //  
byang chub ni lus kyis mngon par rdzogs par 'tsang  
rgya ba ma yin / sems kyis kyang ma yin no // byang  
chub ni mtshan ma thams cad rnam par zhi ba'o //

(TKN 170-171)

なお、『大乘起信論』所引の『修多羅』の「菩提之法非可修相、非可作相、畢竟無得」には、菩提を無為法とするニエアンズが加わっているように思える。これは『金剛仙論』巻二の「菩提無為法身非有為相」(T25:808c) 他、同論に顕著に見られるものでもある。

以下はいわゆる「退治邪執」において引かれる経文を見ていこう。

Q3 一者聞『修多羅』説「如来法身畢竟寂寞猶如虚空」、以不知為破著故即謂「虚空是如来性」。云何对治。明虚空相是其妄法体無不実、以对色故有是可(可↓可見?)相令心生滅。以一切色法本來是心実無外色、若無色者則

無虚空之相。所謂一初(切?)境界、唯心妄起故有。若心離於妄動、則一切境界滅。唯一真心、無所不遍。此謂「如来广大性智究竟之義非如虚空相」故。

(T32:580a)

一には『修多羅』に「如来法身は畢竟じて寂寞にして猶お虚空の如し」と説けるを聞きて、著を破せんが為なるを知らざるを以つての故に即ち「虚空是れ如来性なり」と謂わん。云何が対治する。明かさば、虚空の相は是れ其の妄法にして体無にして不実なり、色に對するを以つての故に是の可見相の、心をして生滅せしむるもの有るのみ。一切色法は本來是れ心にして実には外色無きを以つて、若し色無くんば則ち虚空の相も無し。所謂一切境界は唯だ心の妄起するが故に有り。若し心、妄動を離るるならば、則ち一切境界滅し、唯一真心、所として遍せざる無し。此れは「如来の広大なる性智の究竟の義は虚空の相の如くには非ず」といふが故にと謂うなり。

この『修多羅』については、『説釈』(三九九頁)は仏を虚空に喩える説が『究竟一乘宝性論』に出ると示唆し、『陀羅尼自在王經』『金剛般若經』がその素材であると指摘している。筆者は『説釈』をヒントに調査し、勒那摩提訳『究竟一乘宝性論』巻四所引の次の経(『智光明莊嚴經』)に同定した。

「經」中說言「如虛空相、諸仏亦爾」者、此依第一義諸  
仏如来清淨法身自体相不共法故作如是說。

(T31:842a)

yad ukram akāśalakṣaṇo buddha itī tat pāramāṅhikam  
aveṅkani tathāgatānaṃ buddhalakṣaṇaṃ abhisamdhayoktam.

(RCV 84, 3-4)

梵文には清淨法身という言葉は出ないが、勒那摩提訳「究竟一乘宝性論」は如来が虚空に喩えられる際には必ず法身と訳する傾向にある。また『金剛仙論』巻八も断疑分の第六段(T25:855a-856c)において頻繁に法身を虚空に喩えている。それと同じ理解が『大乘起信論』所引の『修多羅』の訳文にも現われているように思われる。

Q 4 二者間「修多羅」説「世間諸法畢竟体空」乃至「涅槃真如之法亦畢竟空。従本已来自空、離一切相」、以不知為破著故即謂「真如涅槃之性唯是其空。云何对治。明真如法身自体不空具足無量性功德故。」(T32:580a)

二には『修多羅』に「世間の諸法は畢竟じて体空なり」乃至「涅槃真如の法も亦た畢竟じて空なり。本より已来自ずから空にして、一切相を離れたり」と説けるを聞き

て、著を破せんが為なるを知らざるを以つての故に即ち「真如涅槃の性は唯だ是れ其の空なるのみ」と謂わん。云何が对治する。真如法身は自体不空にして無量の性功德を具足するというを明かすが故に。

この『修多羅』を、『説釈』(二九九―四〇〇頁)は法蔵『大乘起信論義記』に従つて『大品般若經』に同定し、上の『大乘起信論』の文全体が『金剛仙論』巻三と相似すると指摘している。すなわち同論の我空法空分が四種の法空(①無法相・②非無法相・③無相・④非無相)を述べるうち、①無法相・②亦非無法相に当たる箇所である。

①「無法相」者、对治法相也。何者是法相。凡夫人於十二人中、見有能取可取不同、故計謂実有。对治此心故、言「無法相」。明十二入能取六識可取六塵悉皆空寂本来不生。故「大品經」云「無有一法出法性者」乃至「涅槃、我亦説言、如幻如化」。

②亦非無法相」者、对治非法相。疑者問「十二入一切法空、便謂「真如仏性無為之法亦皆性空故空同虚空」亀毛兎角等無為。对治此疑故、答云「亦非無明(法?)相」。今言「一切法空」者有為之法無体相故空、然真如仏性法万徳円満体是妙有湛然常住非是空法。直以体

無万相故、説為空。不同前有為諸法性空之無。又亦不同兔角等無。故言「亦非無法相」也。(T25:813c-814a) ①「法相無く」とは、法相を対治するなり。「問う」何れか是れ法相なる。「答う」凡夫の人は十二入の中に於いて、能取・可取の不同有るを見て、故に計して実有と謂わん。此の心を対治せんが故に、「法相無く」と言うなり。十二入なる、能取の六識と可取の六塵とは悉く皆な空寂にして本来不生なり、というを明かすなり。故に「大品經」に「一法として法性を出づる者有ること無し」乃至「涅槃まで、我れは亦た説きて

「幻の如く、化の如し」と言う」と云うなり。

②「亦た法相無きにも非ず」とは、非法相を対治するなり。疑者は「十二入なる一切法は空なり」と聞きて、便ち「真如仏性たる無為の法も亦た皆な性空なるが故に空なり。虚空なる龜毛・兔角等の無に同ず」と謂わん。此の疑いを対治せんが為の故に、答えて「亦た法相無きにも非ず」と云うなり。今「一切法は空なり」と言うは、有為の法は体相無きが故に空なるも、然るに真如仏性の法は万徳円満し、体是れ妙有にして湛然として常住たり。是れ空法なるに非ず。直だ体に万相無きを以つての故に、説きて空と為す。前の有為の諸法の性空の無に同じからず、又亦た兔角等の無に同じから

ず。故に「亦た法相無きにも非ず」と言うなり。

引かれているのはそれぞれ鳩摩羅什訳「大品般若經」習應品・幻聽品の文に対応する。

復次舍利弗。菩薩摩訶薩、行般若波羅蜜時、不見有法出法性者。(T8:224bc)

punar aparāṃ Śāriputra bodhisattvo mahāsattvaṃ  
prāṇāparāmitāyāṃ caran na kiñcid dharmadhātōr  
vyatiriktaṃ samanupāsyaṃ. (PVSP-Dutā 57.4-5)  
我説涅槃亦如幻如夢。(T8:276b)

nirvāṇaṃ an apy ahaṃ Devaputrāṃ svapnōpamaṃ nāyōpamaṃ  
iḍa vadāmi. (PVSP<Kimura> 11.22-23)

Q5 三者聞「修多羅」説「如來之藏無有增減、體備一切功德之法」、以不解故即謂「如來之藏有色心法自相差別」。云何對治。以唯依真如義説故。因生滅染義、示現説差別故。(T32:580a)

三には「修多羅」に「如來の藏に増減有ること無く、體に一切功德の法を備う」と説けるを聞きて、解せざるを以つての故に即ち「如來の藏に色心法の自相の差別有り」と謂わん。云何が對治する。唯だ真如の義に依りて

のみ説けるを以つての故に。生滅染の義に因りて、説の差別を示現するが故に。

この「修多羅」について、「説釈」(四〇〇頁)は「不增不減經」「勝鬘經」を挙げ、上の「大乘起信論」の文全体が「金剛仙論」卷三と相似すると指摘している。すなわち先に触れた前述の四種の法空(①無法相・②非無法相・③無相・④非無相)のうち、③無相に当たる箇所である。

③「無相」者、対治於相。疑者聞(真如是)有体相、不空、便謂(還)同色等有為之有、又云(若有、応)同色香味触有為之有。若無、応同性空兔角等無。此名為相。对此疑故、答云「無相」。明真如法体妙有妙無、語真妙、有(有↓雖有?)不同前色等法有、雖無不同兔角等無。故云「無相」也。(T25814a)

③「相無く」とは、相を対治するなり。疑者は(真如は)是れ体相有りて空ならず」と聞いて、便ち(還)りて色等の有為の有に同ずべし」と謂い、又た(若し)有ならば、応に色・香・味・触の有為の有に同ずべし。若し無ならば、応に性空・兔角等の無に同ずべし」と云わん。此れを名づけて相と為す。此の疑いに對せんが故に、答えて「相無く」と云うなり。真如法体は妙有に

して妙無なり、語は真妙にして、有なりと雖も前の色等の法の有に同ぜず、無なりと雖も兔角等の無に同ぜず、というを明かすなり。故に「相無く」と云うなり。

つまり「大乘起信論」所引の「修多羅」は「金剛仙論」所出の文「真如是有体相、不空」に相当するのだが、「真如是有体相、不空」は經文でなく、Q4で見た「金剛仙論」の②亦非無法相の文「然真如仏性法万徳円満体是妙有湛然常住非是空法」を指す。もつとも、この文は「勝鬘經」の説く不空如来蔵を踏まえているから、「修多羅」は「勝鬘經」と見てよい。いずれにしても取意の文である。

なお筆者が違和感を覚えるのは、この「修多羅」に出る「無有増減」という表現である。如来蔵が「無有増減」なのは当然であるが、「無有増減」は色心法にない屬性であるから、「無有増減」という表現が經文にあると(如来の蔵に)色心法の自相の差別有り」という誤解が発生しがたいのではなからうか。「金剛仙論」所引の經文には「無有増減」に当たる表現はないが、そのほうが適切に思われる。

おそらくは、「大乘起信論」の現漢文テキスト成立に関わつた者(インド撰述の場合は訳者、中国撰述の場合は著者)が、如来蔵(法身)について「無有増減」という表現を想起する傾向にあった。それで不用意に、「無有増減」という表現



を文章に付加してしまったのでなかるうか。ちなみに「無有増減」は『金剛仙論』巻八・九の断疑分において、法身の表現として何度か出 (T25:859a861c)、菩提留支が講義で語っていたことが判る。

Q6 四者聞『修多羅』説「一切世間生死染法皆依如来藏而有。一切諸法不離真如」、以不解故謂へ如来藏自体具有一切世間生死等法。云何对治。以如来藏従本已来唯有過恒沙等諸淨功德不離不異真如義故。以過恒沙等煩惱染法唯是妄有性自本無從無始世来未曾与如来藏相應故。若如来藏体有妄法而使証会永息妄者、則無是处故。(T32:580a)

四には『修多羅』に「一切世間生死染法は皆な如来藏に依りて而も有り。一切諸法は真如を離れず」と説けるを聞きて、解せざるを以つての故にへ如来藏は自体に一切世間生死等の法を具有す」と謂わん。云何が对治する。如来藏には本より已来、唯だ恒沙を過ぐる等の諸の淨功德と離れず断せず異なるざる真如の義有るのみなるを以つての故に。恒沙を過ぐる等の煩惱染法は唯だ是れ妄有にして性自ずから本無にして、無始世より来のかた、未だ曾つて如来藏と相應せざるを以つての故に。若し如来藏、体に妄法有りて而も証会せしめて永に妄を息むと

いわば、則ち是の処無きが故に。

この『修多羅』について、『読釈』(四〇〇頁)は求那跋陀羅訳『勝鬘經』と菩提留支訳『入楞伽經』との文を拵げている。但し、どちらの經にも「一切世間生死染法皆依如来藏而有」に当たる文のみがあつて、「一切諸法不離真如」に当たる文がない。これは勒那摩提訳『究竟一乘宝性論』巻四所引の『勝鬘經』でも同じである。

如「聖者勝鬘經」言「世尊、生死者依如来藏。有如来藏故説生死。是名善説」故。(T31:839b)

yad āha - sahī Bhagavaṃs tathāgatagarbhe saṃsāra itī parikalpan asya vacanam itī. (RGV 73:5-6)

しかるに『金剛仙論』巻七には、

若会真如平等之解者、知此法雖時異用別、語其所歸無有異相離於真法界條然有也。故『勝鬘經』云「依如来藏建立一切法」。(T25:851b)

若し真如平等の解を会せば、此の法は時は異にして用は別なりと雖も、其の歸する所を語らば異相として真法界を離れ條然として有なるもの有ること無し、と知るなり。

故に「勝鬘經」に「如来藏に依りて一切法を建立す」と云うなり。

とあって、「一切諸法不離真如」に当たることがら「勝鬘經」を例に説かれている。それと似た理解によって「大乘起信論」所引の「修多羅」Ⅱ「勝鬘經」の訳文には「一切諸法不離真如」という句が付加されたように思われる。

Q7 五者聞「修多羅」説「依如来藏故有生死、依如来藏故得涅槃」、以不解故謂「衆生有始」、以見始故復謂「如来所得涅槃有其終尽、還作衆生」。云何对治。以如来藏無前際故、無明之相亦無有始。若説「三界外更有衆生始起」者、即是外道経説。又如来藏無有後際、諸仏所得涅槃与之相則無後際故。(T32:580ab)

五には「修多羅」に「如来藏に依るが故に生死有り、如来藏に依るが故に涅槃を得」と説けるを聞きて、解せざるを以つての故に「衆生に始まり有り」と謂い、始まりを見るを以つての故に復た「如来の所得の涅槃に其の終尽有り、還りて衆生と作る」と謂わん。云何が对治する。如来藏に前際無きを以つての故に、無明の相にも亦た始まり有ること無し。若し「三界の外に更に衆生の始起する有り」と説かば、即ち是れ外道経の説なり。又た

如来藏に後際有ること無し、諸仏の所得の涅槃は之と相応して則ち後際無きが故に。

この「修多羅」について、「読釈」(四〇〇―四〇一頁)は求那跋陀羅訳「勝鬘經」と菩提留支訳「入楞伽經」とを挙げているが、あまり一致しない。実は、この「修多羅」とほぼ完全に一致するのが勒那摩提訳「究竟一乘宝性論」卷四所引の「勝鬘經」であり、しかも梵文にその文を欠くことを、高崎直道博士が指摘している。

如「聖者勝鬘經」言「依如来藏故有生死、依如来藏故証涅槃。世尊、若無如来藏者、不得厭苦樂求涅槃」。

yad āna - tatthagatagarhas ced Bhagavan na syān na syād  
dūḥkhe 'pi nirvān na nirvāna iccha prāraṭhāna prapīdhir  
veti. (RGV 73,7-8)

同博士は「大乘起信論」が梵文「勝鬘經」にはなく、勒那摩提訳「究竟一乘宝性論」に依拠したのでないかとの疑念を示している。

Q8 如「修多羅」中或説「有退墮惡趣」者非其實退。

但為初学菩薩未入正位而懈怠者恐怖令使勇猛故。

(T32:581a)

【修多羅】の中に或るが「惡趣に墮墮すること有り」と説けるが如きは其の実退に非ず。但た初学の菩薩の未だ正位に入らず而も懈怠なる者を恐怖し勇猛ならしめんが為のみなるが故に。

信成就発心について引かれる経である。【誦釈】(四二七頁)は『金剛仙論』巻一に全く同様の思想が出ることを指摘している。

是以『宝鬘論』中、有人問(問?)龍樹菩薩云「地持經」中道「性地菩薩墮阿鼻地獄」、此義云何。龍樹菩薩答言「地持經」雖云「性地菩薩墮於地獄」、我不敢作如是説。何以故。『不增不減經』中明「性地菩薩畢竟不墮地獄」。又『藥莊嚴經』中説「性地菩薩若一時殺闍浮提衆生、雖有此罪、猶不墮地獄。…」以此驗知性地菩薩不墮地獄。若爾者、二經相違云何會通。解云。『地持經』中道「入」者、催怖地前菩薩、令其生懼速証初地。非謂「実入阿鼻地獄」。

(T25:803b)

是を以って『宝鬘論』の中に、有る人、龍樹菩薩に問うて「地持經」の中に「性地の菩薩は阿鼻地獄に墮

墮す」と道うは、此の義云何」と云う。龍樹菩薩答えて「地持經」に「性地の菩薩は地獄に墮す」と云うと雖も、我れは敢えて是の如き説を作さず」と言う。【問う】何を以つての故に。【答う】『不增不減經』の中に「性地の菩薩は畢竟じて地獄に墮せず」と明かす。又た『藥莊嚴經』の中に「性地の菩薩は若し一時、闍浮提の衆生を殺すも、此の罪有りと雖も、猶お地獄に墮せず。…」と説く。此れを以つて験して、性地の菩薩の地獄に墮せざることを知るなり。【問う】若し爾らば、二經の相違を云何が會通せん。【答う】解して云わく。『地持經』の中に「入る」と道言うは、地前の菩薩を催怖して、其の生をして懼れ、速やかに初地を証せしむ。へ実に阿鼻地獄に入る」と謂うに非ず。

この「地持經」について、筆者らの国訳では曇無讖訳「菩薩地持經」成熟品を指示したが、その後、すでに戦前に望月信亨博士がこの箇所に注目し、同経種性品を指示していたことに気づいた。

種性菩薩久処生死或墮惡道。

(T30:889b)

iha bodhisatvo dirghena kālena kadācī karhīcī  
apāyēsūpapadyate. (BoBh 10, 12-13)

成熟品の方も同じ内容であるが、この種性品のほうが文面上ふさわしいかもしれない。

Q9 如『修多羅』説「若人專念西方極樂世界阿彌陀仏、  
①所修善根迴向願求生彼世界、②即得往生。常見仏故、  
③終無有退」。若觀彼仏眞如法身常勤修習、畢竟得生住  
正定故。  
(T32:283a)

『修多羅』に「若し人、専ら西方極樂世界の阿彌陀仏を念じ、①所修の善根を迴向し彼の世界に生ぜんと願求せば、②即ち往生することを得。常に仏を見たてまつるが故に、③終に退有ること無し」と説けるが如し。若し彼の仏の眞如法身を觀じ常に修習に勤むるならば、畢竟じて生ずることを得、正定に住するが故に。

修行信心分の末尾、淨土信仰を勧める有名なくだりにおいて引用される經である。この『修多羅』について、『読釈』(五〇五―五〇六頁)は淨土三部經のいくつかの文を挙げているが、完全に一致する文はない。筆者はこれがほぼ康僧鎧訳『無量壽經』卷下冒頭の次の文に相当すると考える。

諸有衆生聞其名号信心歡喜、①乃至一念至心迴向願生彼

國<sup>2</sup>即得往生<sup>3</sup>信不退轉。(T12:272b)

ye keci saṅghāṣṭasya 'mitābhāṣya taḥgāgatasya nāmadhayan  
śrīyanti, śrūtvā cāntasā ekacittopādān apy adhyāsavyena  
prasadāsahagalam upādāyanti, sarve te 'vaivar'itakatāyān  
santi śīḥante 'nūtarāyāḥ samyaksambodhēhi. (SVy 42,4-8)

なお「大乘起信論」に①「所修善根迴向」とあるのが『無量壽經』には①「乃至一念至心迴向」とあって少しく異なるが、法藏菩薩の第十九願 (SVy 14, 2d) には衆生が upapattaye kusalamūlāni ca pañānamāyeyuḥ (往生のために善根を迴向したとして) 往生できないならば正覚を取るまい云々とあるので、『大乘起信論』はその辺をも採り入れたのかもしれない。ちなみにその箇所の康僧鎧訳は「殖諸徳本至心迴向」(T12:268b) である。

以上の同定結果を五十音順に整理しよう。

- A 『華嚴經性起品』一回
- B 『勝鬘經』三回
- C 『大品般若經』一回
- D 『智光明莊嚴經』一回
- E 『菩薩地持經』一回
- F 『無量壽經』一回

G 『維摩詰所説經』一回

このうちA B Dの訳文や引用形式は勒那摩提訳「究竟一乘宝性論」に類似し、B C Eの訳文や引用形式は菩提留支の講義録『金剛仙論』に類似していた。こうして見ると、『大乘起信論』にはこれらの漢文文献と類似した思想の持ち主による、中国撰述の気配が濃厚だと言わざるを得ない。

但し、中国撰述だとしても、インド人が関与した可能性が残る。『金剛仙論』が菩提留支の講義録であるように、『大乘起信論』もそうかもしれないのである。引用文献の訳文が取意的であるのはインド人が自分の知る範囲の中国語の語彙で、梵語の意味を表現したからだと考えることもできよう。

また、注目すべきなのは引用文献がどれも六世紀前半の中国北地に存した經典ばかりだということである。このことと、同論が初めから北地の人間に向けて造られたのでないかという印象を強める。特に鳩摩羅什の訳した『維摩詰所説經』に關しては、『大乘起信論』の二箇所<sup>8</sup>の文が注目される。

觀一切法因縁和合業果不失、起於大悲、修諸福德、攝化衆生、不住涅槃。  
(T32:580c)

一切法の因縁和合なるも業果の不失なるを觀じ、大悲を起こし、諸福德を修し、衆生を攝化し、涅槃に住せず。所謂、雖念諸法自性不生、而復即念因縁和合善惡之業

苦樂等報不失不壞。

(T32:583a)

所謂る、諸法の自性不生なるを念ずと雖も、而も復た即ち因縁和合せる善惡の業と苦樂等の報との不失・不壞なるを念ず。

この二文においては諸法が因縁和合<sup>8</sup>で空であると雖も業は不失であることが強調されている。これは『維摩詰所説經』仏國品の次の偈に拠るかもしれない(世親『釈軌論』第四章もこの偈を引き、大乘の説く空が虚無論でない証とする<sup>9</sup>)。

諸法不有亦不無 以因縁故諸法生  
無我無造無受者 善惡之業亦不亡

(T14:537c)

mchis pa ma lags pa dang ma mchis ma lags dang /  
chos 'di thams cad rgyu las brten nas 'byung ba dang /  
'di la bdag med tshor ba po dang byed med cing /  
dge sdig las ci'ang chud mi za zhes gsung gis ston //  
(VKM 149, 5-8)

鳩摩羅什訳については更に『諸法無行經』との關係を指摘したい。同經は法界一相を強調する經典で、『金剛仙論』巻七 (T25:851c) においても無記名で言及されているが、『大乘

起信論』勸修利益分の文、

假使有人能化三千大千世界滿中衆生令行十善、不知有人於一食頃正思此法。

(T32:583ab)

假使有有人、能く三千大千世界を満たす中の衆生を化して十善を行ぜしむるも、有る人、一食頃に於いて此の法を正思するに如かず。

は、『諸法無行經』卷下の文、

菩薩若能教三千大千世界中衆生令行十善、不如菩薩如一食頃一心靜処念一相三昧、乃至聞受讀誦解說其人、福德勝彼甚多。

(T15:753b)

rigs kyi bu gal te stong gsum gyi stong chen poi 'ig rten  
gyi khams na / sems can gang ci snyed cig yod pa de dag  
thams cad byang chub sems dpa' la la zhi gis dge ba bcu'i  
las kyi lam la bkod pa bas byang chub sems dpa' gang  
gcig pu dben par 'dug ste / chung ngu na se gol gtags pa  
tsam du 'ang chos thams cad tshul gcig par yid ches shing  
tha na chung ngu dri ba 'am / dpyad pa 'am / lung 'bog pa  
'am / kha ton bya ba'i phyir gras pa / 'di ni de bas ches  
bsod nams mang du 'phel lo //

(SDHAN 132)

に基づくように思われる。なお、「三千大千世界滿中」として「滿」字を入れるのは菩提留支訳『金剛般若波羅蜜經』等に顯著な訳例である。

『維摩詰所說經』『諸法無行經』は六世紀の北地の禪文獻『二入四行論』においても重視され、特にQ2の文は同論第二九段にも引かれている。また石井公成博士は『大乘起信論』の解行発心における六波羅蜜の説明 (T32:580c) が『二入四行論』の称法行の文と相似することを指摘している。あるいは『大乘起信論』は『二入四行論』同様、六世紀の北地の思想運動に根ざしているのかもしれない。そうした思想運動の検証が今後の急務となろう。

注

- (1) 高崎直道『大乘起信論』の素材「平川彰・編『如来蔵と大乘起信論』春秋社、一九九〇。
- (2) 竹村博士との共訳を刊行中である。既刊は竹村牧男・大竹晋校註『金剛山論 上』大藏出版・新国訳大藏經、二〇〇三。講義録云々において同書解題を見よ。
- (3) 網羅的には註2前掲書解題を見よ。
- (4) 翻刻・石井公成『元暉の和静思想の源流』『印度学仏教学研究』五・一・一、二〇〇一。
- (5) 高崎直道『宝性論』講談社、一九八九、一四九頁註三。
- (6) 高崎直道『大乘起信論』の語法―「依」「故」等の用法をめぐって『早稲田大学大学院文学研究科紀要』三七、一九九二。

の論文については石井公成博士より御教示を受けた。

(7) 註2前掲書、三三五頁。望月信亨『講述大乘起信論』富山房百科文庫、一九三八、一八六頁。

(8) 同、『究竟一乘宝性論』卷二「如是諸法、從於因緣和合而生、以諸因緣壞散而滅」(sarva ete dharmā hetu-pratyaya-samgrhāḥ upadyante hetu-pratyaya-samagrā nirdhyanāte) (T31:833b; RGV 45, 45)

(9) 本庄良文『釈軌論』第四章「世親の大乗仏説論(一)」(「神戸女子大学紀要」一三・一、一九九〇、六五頁。

(10) 石井公成「二大行論」の再検討(「平井俊梁博士古稀記念論集三論教学と仏教諸思想」春秋社、二〇〇〇、三七九頁。なお筆者は解行発心において六波羅蜜が説かれること自体は「撰大乘論」III.3に拠ると思ふ。

## 略号

BoBh: *Bodhisattvaśāstram*, ed. U. Wogihara, Tokyo 1930-1936.

LAS: *Lankavatāsūtra*, ed. B. Nanjo, Kyoto 1923.

PVSP<D>ut: *Pāṇḍarīyāsāstra* *Pratīkāramitā*, ed. N. Dut, Calcutta 1934.

PVSP<K>imura: *Pañcaviṃśatisāhasthā Prajñāpāramitā* II-III, ed. TKimura, Tokyo 1986.

SDHAN: *Sarvadhamābhavarttirīśa*, ed. J. Braavig, in: *Manuscripts in the Schøyen collection I Buddhist Manuscripts*, Oslo 2000.

SV: *Sukhābhayaḥkha*, ed. Tashkaga, Kyoto 1965.

VKN: *Vimalakīrtirīśa*, ed. J. Ostka 1970, in: 「インド古典研究」成田山新勝寺。

## 付記

『哲学・思想論叢』二十一号、二〇〇三掲載の拙稿「入楞伽經」と「大

乗起信論」の誤植・誤訳を訂正する。訂正に当たっては船山徹先生より多くの助言を受けた。

六八頁下五行 *nirvohāḥ*の後にピリオド。

六八頁下五行「根識の滅、大慧よ、すなわち、の滅」↓「根識の滅とは、大慧よ、すなわちの滅であり」。

六八頁下五行「六九頁上五行 次のように改訳。「次に相統滅とは、大慧よ、あることから起る。あることは、あるものを依止とし、あるものを所縁としてである。あるものを依止とするとは無始時來の戲論の危重の習氣」を]である。あるものを所縁とするととは識境

に対し諸の分別があるのである」。

七〇頁上九行「知られず」↓「よくは知られず、あるいは」。

七一頁上五行「意識の滅」↓「意識だけの滅」。

七一頁上八行「境界の差別への執着」↓「境界への分別と執着と」。

七二頁上〇行・二行「授くる」↓「授ける」。

七三頁下七行 *nānvāhata* → *nānvāzātha*。

七四頁上五行 *mano-vijñānam vijñāna-prabandha eva* → *vijñāna-prabandha eva mano-vijñānam*。

七四頁上六行 *viñāto* → *viñāho*。

七四頁下七行 \**dehur* → \**dehi*。

七七頁下八行の PVSP について。PVSP 同頁註るに MSS drop here na とある。筆者はこの註を看過して、*na* が *ta* の誤りで *maṅgāna* を指すと思っていたが、*na sa* のないほうが漢訳に合う。ゆえに *na sa* は削除。

八〇頁下八行 *śānta* → *śātra*。

平成十五年度文部科学省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部。

(おおたけ・すすむ 日本学術振興会特別研究員)